

今回のシンポジウムで私は、“Foreshadowing in the *Kōmyōji Illustrated Handscroll of the Legends of the Taima Mandala: A Compositional Analysis of Text and Image*”（『当麻曼荼羅縁起絵巻』(光明寺蔵)における予示的表現—詞書と絵の構成分析を通じて—）の題で発表をおこなった。「当麻曼荼羅縁起絵巻」とは、奈良・当麻寺の創建とそこに伝わる「当麻曼荼羅」の織成を記した十三世紀の縁起絵巻である。私は発表でこの絵巻に繰り返し描かれる建築の存在を指摘し、その反復描写が詞書(テキスト)の構成を反映しているのではないかと提言した。

発表内容は昨年十二月に東京大学に提出した修士論文の一部を抽出したものであり、本来ならば目の目をみるまでに相当の時間がかかったと思われる。しかし、このように早い段階でアイデアを提示する機会が与えられ、フィードバックを得られたのは今後の研究方針を検討する上で非常に有益であった。また、発表後に「面白いアイデアだ」との言葉をいただけたことは大きな励みにもなった。英語での口頭発表の経験が少ないため不安と緊張が大きく、発表終えて振り返っても論の組み立て方や質疑応答での対応など反省点も多い。一方で、何事にも初めてや不慣れの時があり、それを越えてこそ前進できると考えれば、今回の発表は未熟ながらもその一歩を踏み出すための貴重な経験になったといえる。海外における学術的な蓄積と成果を吟味しながら摂取し、自らも国際的な場で発信してゆく必要性は、あらゆる学問分野において今後ますます求められるであろう。これは日本美術史も例外ではないとシンポジウムを通じて私は痛感した。より広く世界に向けて自分の研究を提示してゆくときに今回の経験は背中を押してくれるに違いない。

国と大学、分野を越えての学生間の交流は、私にとって新鮮であると同時に自分の視野の狭さを知る契機となった。コロンビア大学博士課程の院生が自身の研究を「仕事」と認識していると知った時には、アメリカと日本における大学院生の意識の差に大変驚かされた。世界も研究も、自分が想像していたよりもずっと広い。それゆえの困難も多いが、だからこそ魅力も興味も尽きないのだと強く感じた。それを実感できたのはとても幸運だった。

最後に本シンポジウムを主催してくださった早稲田大学とコロンビア大学の両大学に深く感謝したい。